

言行録にみる

舛添氏と原発問題

舛添要一都知事の素顔②



福島事故前「原発は欠かせない」
いまも、即原発ゼロをいわない舛添氏

いまだに深刻な事態がつづく福島原発事故。

舛添氏は、福島原発事故以前は「温暖化ガスを削減するには原子力発電の利用は不可欠」(自著「構造改革で得する人、損する人」2002年1月幻冬舎)との態度をとっていました。

舛添氏は、福島原発事故をうけ、この考えを変えたのでしょうか。

福島原発事故後の自著(「日本政府のメルトダウン」2011年11月講談社 引用書①)で見

てみましょう。

舛添氏は、福島原発事故について「巨大余震が発生しなくても、日本民族が滅ぶ可能性が残って

いる」とその重大性を指摘、当時の菅内閣の対応を厳しく批判しています。それでは舛添氏は、「原発の利用は不可欠」の考えを「原発即ゼロ」に改めたのでしょうか。

述べています。さらに都知事当選後の談話でも「原発依存体質を少しずつ減らすのは重要だが、国との調整も必要」(2014年2月9日東京新聞)と語り、当面の原発

存続や原発再稼働にひた走る安倍政権との調整の必要性を述べました。つまり舛添氏は、即原発ゼロには反対であり、当面の原発の再稼働を認め、原発に依存する姿勢に変わりはありません。

舛添氏は、同書で「脱原発依存を今後の流れに」といながら、「いきなり原発はすべて廃止では、日本経済は麻痺」すると

事故前—安全神話を振りまいた舛添氏 事故後—安全神話を他人事にすり替え

また舛添氏の事故後の

原発の安全神話に関する

発言をみると、その変わり身の早さには、驚くばかりです。

舛添氏は、「(福島の原発事故をうけ)原発に対して国民は安全性に不安を感じている」のに「電力会社と霞ヶ関、御

用学者が一体となつてつくり上げたのが安全神話である」(引用書①)と原発の安全神話を批判しています。

舛添氏も繰り広げた安全神話

舛添氏は安全神話に無関係だったのでしようか。ところが舛添氏自身も安全神話を振りまいてきた一人です。

同氏の著書「完全図解日本のエネルギー危機 データーで読む『国民の常識』」(1999年12月東洋経済新報社)で、原発の安全性を次のように述べています。

(太字の見出しは編集部)

原発は多重防護の安全策がとられている。「原子力発電所は定期検査などによる厳重な品質管理、日常の徹底した運転管理、さらには万一の場合に備えてこの多重防護設計によって安全を確保している」と図表入りで詳しく説明。

安全管理も万全「安全管理の基本は『止める』『冷やす』『閉じ込める』である。原子炉を『止める』必要があるときは、制御棒を原子炉に挿入する。また『冷やす』ためには炉心に水が絶えないようになっている。仮に、配管が破断して大量の水が流出する事態に至っても、非常用炉心冷却装置が作動する」と説明。

放射性物質の対策も「放射線物質を『閉じこめる』ためには、格納容器など『五重の壁』が機能を發揮する」と述べています。

地震対策にも細心の注意が「地震対策については、原子力発電所は大地震に耐えられるように細心の注意が払われ」「建設場所は・直下型地震の原因となる活断層がないことを確認し・強固な岩盤の上に直接建設」

している」と原発の「安全性」を強調してきました。

さらに、チェルノブイリ原発事故にふれ、「日

本でも・原発事故が起きるかもしれない」。しかし「そのときでも原子炉をすぐに止めたり、放射線を外部に漏らさないようにする多重防護の安全対策が取られていることを、国民にきちんと説明することが大切です」と述べていたのです。

「原発の必要性を学校でも教えよ」と強調

さらに舛添氏は、原発の新たな建設のためには、「(原発の必要性や安全性について)」「国民教育を相当やらないと容易ではない」「教科書に書いて学校教育で教えることが必要」「原子力施設を家族で見学するなど家庭教育(も必要)」「(舛添のどうなる日本、どうする日本」2001年6月東京書籍)とも述べてきました。

舛添氏には、まず自らのこれらの発言を検証してほしいものです。